

氏名： 天野 知香 (AMANO Chika)
所属： 人間文化創成科学研究科文化科学系
学位： 博士 (文学)
職名： 准教授
専門分野： 西洋近代美術史
E-mail： amano.chika@ocha.ac.jp

◆研究キーワード / Keywords

アンリ・マティス／装飾芸術／フェミニズム美術史／19－20世紀美術／現代美術
Henri Matisse / Decorative Art / Feminism art history / 19-20th Century art history / Contemporary art

◆主要業績

総数 (3) 件

- ・ 学術単行図書所収論文 1, 天野知香「マティス研究の現在から 二, 三の批判的考察」、永井隆則編、『フランス近代美術史の現在』、三元社、2007年、pp.275-316。
- ・ 学術単行図書所収論文 2, 天野知香「視覚『芸術』における身体－フェミニズムによる美術史の再検討」、竹村和子編、『シリーズ ジェンダー研究のフロンティア第五巻 欲望・暴力のレジーム－揺らぐ表象／格闘する理論』、作品社、2008年、pp.23-44。
- ・ 学術発表 1, 天野知香 (研究発表)「女たちのフェアリー・テール－現代美術における人形・少女・老婆－」お茶の水女子大学 21世紀 COE プログラムジェンダー研究のフロンティア、プロジェクト D 企画、日韓国際シンポジウム「文化表象の政治学－日韓女性誌の再解釈」、お茶の水女子大学、2007年8月29日。お茶の水女子大学 21世紀 COE プログラムジェンダー研究のフロンティア、プロジェクト D 編、『日韓国際シンポジウム「文化表象の政治学－日韓女性誌の再解釈」発表記録』、お茶の水女子大学、2007年、pp.69－80。

◆研究内容 / Research Pursuits

美術史学における近年の方法論的な最新の成果を検討し、新たな提言を行った。具体的には論文 1 においてアンリ・マティス研究の国際的な現状を批判的に検討した上で、特に 1920 年代のマティスの作品について、今日において有効な研究姿勢と視点を踏まえた新たなマティス研究の方向を提示した。また論文 2 および学術発表において、本学 COE「ジェンダー研究のフロンティア」の 5 年間のジェンダー研究における蓄積を踏まえ、フェミニズム美術史の観点から特に身体表象を中心とした近代の視覚表象の諸問題を、具体的な作例を通して理論的に検討すると同時に、西欧の 20 世紀および現代の日本における女性作家による少女、人形、老婆のテーマをとりあげ、フェミニズムの視点による表象分析を試みた。

◆教育内容 / Educational Pursuits

講義においては「近代西歐美術と空間」をテーマに多面的な視点から具体的な作品解釈の可能性を提示することで、美術史の学問的な枠組みを再検討し、具体的な作品解釈と研究方法の姿勢を養った。またゼミにおいては学生の研究指導に加え、英文、仏文文献の講読によって、理論的方法論的な美術史研究のための力を養うことを目指した。

◆研究計画

現在の美術史の学問的な枠組みと作品解釈をめぐる理論的な考察をさらに推し進めると同時に、今春アメリカでの資料調査を踏まえたアンリ・マティス研究の継続と、1920年代における装飾芸術や女性芸術家をめぐる問題の実証的な調査をさらに展開させてゆきたい。

◆メッセージ

メディアにあふれている「美術」についての固定的な観念からまず自由になってほしい。そして自分がこれまで生きてきた中でどのような考えを持ち、どのような感性を養ってきたのかを自ら確かめながら、直接視覚的なイメージと向き合ってもらいたい。「美術」について感じることは知的な検討を放棄することではない。その時自覚される感性や考え方、知識は、あなた個人のものであると同時にあなたの生きてきた歴史や社会と密接に結びついているものである。「美術」であれ、私たちの日常を取り巻くイメージであれ、それらを見、また生産することは私たちが日々過ごしている現実の社会や生活と密接に結びついた体験であり、視覚表象の意味やあり方はそれが生産され受容される歴史や社会と切り離せない。美術史とはそのような視覚表象の意味生産のプロセスやあり方を実証的論理的に研究する学問です。視覚的なイメージと論理的実証的に対話することを通じて、これまでの「私」を揺るがし、時代や社会との関わりを見据え、捉え直してみたい。